クルト・ケプルナー著
『戦争の国への旅 — ユーゴスラビアでの一外国人の体験』
抄訳（3）

元　吉　瑞　枝

☆原著は次の通りである。

Kurt Köpruner: *Reisen in das Land der Kriege*
— Erlebnisse eines Fremden in Jugoslawien —
Überarbeitete Neuausgabe: Diederichs im Heinrich Hugendubel Verlag, Kreuzlingen/München 2003.

本号では、本稿·前々号（本誌第10巻第２号所収）の目次概観で「<II>クロアチアでの戦争—1991年から1995年まで」と分類されたブロックのうち、前号につづく箇所（原著62頁から81頁）について、その前半（原著62頁〜72頁）の大意および後半（原著72頁〜81頁）の全訳を掲載する。大意と全訳の区別は、章題のあとに明記すると共に、前者については、前号までと同様、前後を［　　］で示してある。

また章題についても、前号までと同様、核となるものは★で、その下位におかれたものは＊で示してある。最初の章題は、前号の、「★『プリヤトノ』－あるいは、或る言葉の誕生」という章題の下位におかれたいくつかの章題のあとにつづくものである。

○○○

＊<クロアチアのため>－<フオアアールベルク[1]のため>　［大意］

［私（＝著者、以下、同）は、クロアチアで見聞きした反セルビアの感情がどこからくるのか考えてみて、故郷のフオアアールベルク州で1970年代に起こった、オーストリアからの「分離」運動を思い起こす。この運動の背景

をなしていたのは、勤勉なフオアアールベルクの人々が働いて稼いだ金が、居酒屋でワインを飲むのが何よりも好きというような人たちが多いウイーンに流れていき、自分たちは十分に顧みられず、ただオーストリアに支配され利用されているにすぎないというような心情であった。当時、そのような反オーストリア的な言説が数ヶ月に亘ってフオアアールベルクの日刊紙を賑わせ、土地の人々はそれを受け売りし、それに組しようとする人たちは、みずからをアレマン人[2] と称して誇りにし、他のオーストリア人をバイエルンとスラブの混血であるとして非難したのである。

両者の比較は突飛もないものにみえるかもしれないが、これと同じ質の論法が、私が話したクロアチアの人々にもみられたのだ。そのような印象は、当時すでにダルマチアおよびイストリア地方[3] に強力な反ザグレブ運動が起こっていたという事態によって、いっそう強められた。周知のように、ダルマチアやイストリアは観光地で、他の地方よりは多くの金を稼いでおり、自分達が苦労して稼いだ金がザグレブやベオグラードに流れることを嫌うというのはあり得ることであり、ここにも、フオアアールベルクの分離主義と似たような経済的な動機が認められるのである。

それどころか、クロアチアの（ユーゴからの）独立に関する議論の方が、フオアアールベルクのオーストリアからの分離の主張よりも、首尾一貫性に欠けているとさえいえる。たしかに、クロアチアは、ずっと前からユーゴ連邦共和国のなかの独自の一共和国ではあったが、政治的には、ユーゴ連邦制の内部で、（フオアアールベルクがオーストリアの政治において占めるよりも）はるかに高い地位を占めていたからである。のちに連邦大統領となったメーシチについては既に言及した[4] が、ほかにも、連邦首相や外相もクロアチアの出身だった。特に外相のロンチャル氏は、ザダール[5] の出身で、当地に家族と家があったので、当地では当時よく彼の名前を耳にした。

結局、クロアチアの至るところに感じられた潜在的な憎悪は、経済の悪化と、それにかこつけた扇動によるものだとしか説明できない。しかしこのような扇動も長続きせず、わずかに、民族主義的または狂信的･宗教的な動機を有している人々か、ユーゴからの独立によって利益を得られると見込んでいた少数の人々によって支持されていたにすぎない。これらの人々は合せて10パーセント以下であり、特に、ユーゴからの独立によって利益を得られると見込んでいた人々は0.1パーセントほどしかいなかった。大多数の人々は、ユーゴからの独立によって大きな損失を蒙ったのである。

クロアチア人とセルビア人は別の文化圏に属しているので共存できないと

か、気質や世界観や宗教において、一方は平和的、民主的で、他方は権力的、「ボルシェビキ的」なので合わないといったような言説はすべて、あまりにも単純でナンセンスである。

ところで、フオアアールベルク州の分離運動は、国民投票で否決され、単なるエピソードに終わった。フオアアールベルクは、当時も現在も、繁栄した地域であり、オーストリアも同様である。けれども、もし当時、現在のクロアチアと同様に、不景気で多くの失業者がいたら、いっそう過激な分離主義の言動が支配的になり、相互の罪のなすりあいや集団暴行という事態に至った可能性がなかったとはいえない。経済的窮乏のあるところでは、つねにスケープゴートが作り出されるものだからである。]

★　地図の塗り変え［大意］

［クロアチアでの事件[6]以降、私は、ユーゴで起こる事態に対して、以前にもまして強い関心の眼差しを向けるようになり、ドイツへ帰っても、新聞やテレビから目が離せなくなった。当時多くのジャーナリストが現地から流してくる生放送はトップニュースとなり、しばしば専門家による解説やトークショーも行われた。それらは、私がザダールで体験したことと合致するものも一部はあったが、全般的なトーンは、非常に一面的なものだった。現地を知らない視聴者や読者は誰でも、セルビア人が彼らの狂気じみた大セルビア主義に従って、これまでに類をみないような恐怖政治を行おうとしており、スロベニアやクロアチアは無防備な犠牲者であるという印象をもったにちがいない。私は、私かそれらのジャーナリストのいずれかが病的に偏った感受性をもっているのではないかと自問せざるを得なかった。

そのしばらく後の1991年６月25日、スロベニアとクロアチアが独立を宣言した。丁度その日、私の顧客の或る商店の技術部長が、我々がアレンジした会社訪問のためザダールに滞在していたという事情により、その日付は、私の記憶に刻み付けられている。スロベニアとクロアチアの独立は、テレビやラジオで報じられていたが、その日ザダールには電話がつながらなかった。そのため、社員をザダールに出張させた商店主は、我々が彼の社員を危険な目に遭わせたと責めた。しかしザダールでの厳しい状況を切り抜けて帰ってきた社員が、多くの言葉を費やして事情を説明してくれたのだった。

独立宣言をめぐる事態は、ようやく二日後になってエスカレートした。早朝、ユーゴスラビア連邦人民軍が出動した。それはベオグラードからきた部

隊ではなく、主にスロベニア内にいた部隊である。スロベニア領土防衛隊は、その前日に国境駅を襲撃してこれを占拠し、ユーゴスラビアの国名が記された看板をスロベニアの国名のものと取り替えていた。

既に朝七時のニュースで、この戦闘について大きく報じられていた。スロベニア側は、道路にトラックを横付けにしてバリケードとし、連邦軍の前進を阻もうとしていた。また、セルビアの野蛮な攻撃性を示す証明として、戦車が無実の乗用車を情け容赦なく押しのけ、ショックを受けたドライバーがかろうじて逃げ出すことができたという場面を見せていた。何度となく放映されたこのシーンは、のちに判明したところでは、スロベニアではなく、数百メートル離れたクロアチアのオシエクで起こったことだったのである。このようなことが、この戦争の多くの奇妙な点の一つである。]

＊スロベニア ー あるいは「誰が誰を撃ったのか？」　[大意]

[この戦闘は、オーストリア全土にヒステリックな反応を惹き起し、「オーストリア緑の党」の代表で平和主義を掲げていたペーター・ピルツでさえ、オーストリア軍の支持者へと転向したほどであった。しかし、この戦闘についてあらゆるチャンネルを通じて伝えられたイメージは、事実とは何の関係もないものであった。伝えられたイメージとは、ユーゴスラビア連邦軍が、現実には存在しない「セルビア軍」と常に同一視され、戦車や大砲や航空機や機関銃や毒ガスさえも装備して、スロベニアにあるすべてのものを野蛮に撃ちまくり、他方、スロベニア領土防衛隊の兵士たちが劣悪な装備なまま、しばしば素手でこれに勇敢に立ち向かった、というものである。それを見た視聴者は、それ以外のイメージを抱きようがなく、後々までこれとは別の視点を持ち得ないであろうと思われる。

現実はどうだったのか。私はその場にはいなかったが、それでも、それが全く違うものだったと主張できる。その確信は、この戦闘の犠牲者についての国際赤十字社の統計に基づいている。それはドイツ語圏のメディアでは、欄外の注記としてしか採り上げられなかったものである。それによれば、この戦闘による死者は、ユーゴ連邦軍兵士39名、スロベニア領土防衛隊兵士４名、警察官4名、市民10名、外国人10名である。「誰が誰を撃ったのか？」と、ペーター・ハントケ(7) が数年後に問うている。彼もおそらく、欄外に小さく注記されたこの犠牲者数を見たのであろう。動かしようのないこの数字によっても、みずからのイメージを変えるに至らない人たちのためには、スロベニ

ア側がみずから誇らしく語っているように、ほとんど武装していなかったはずのスロベニア軍が、重装備といわれたユーゴ軍の兵士を数千人捕虜にしたことをも思い起こしていただきたい。

誰でもテレビの生放送で、スロベニア兵が手榴弾と弾幕砲火でユーゴスラビアの国境警備兵を次々に襲い、何が起こったかわからないままのほとんど無防備な連邦軍の兵士や税関吏が、降伏するか引きずり出されるかした様子をライブで見ることができた。これについて、或る識者が記している。「オーストリア放送局は、ユーゴ連邦軍の６，７名の兵士たちの一団が、白旗を持って手を挙げ、スロベニア領土防衛隊に占拠された税関の角を曲がっていく様子をライブで映していた。彼らは武装しておらず、一部は上半身裸だった。彼らに対して機関銃の一斉射撃が行われたのは、明らかに彼らがもう降伏したあとだった。二人の兵士が前のめりに草の中に倒れた。これに対してＴＶのコメンテーターは皮肉な調子で、おそらく和平の提案は挫折したのだろうと解説した。その後のニュースでもこの場面は、短縮されて再度放映された。それでも午後のニュースではまだ、手を挙げている無防備な連邦軍の兵士をスロベニア共和国軍の兵士が撃っていることは明確にされていたが、夜のニュースでは、どちらが被害者か加害者かが不明なままにされた」[8] と…。

これがジャーナリズムの見事な手法であれ情報操作であれ、ここからは、現実の事態はどうだったのかということが読み取れる。すなわち、スロベニア軍があたりかまわず発砲したのに対して、ユーゴ連邦軍は、撃ち返してはいけないという命令を受けていたことは明らかである。それどころか、後でわかったところでは、実弾を所持しないまま出動していたのである。一国が、強力な分離運動を軍事的な手段で阻止しないまま甘受するというような、このような事態は、おそらくこれまでに例のなかったことであると思われる。

いずれにせよスロベニアの独立闘争は、おそらく数世紀にわたって英雄的な行為として讃えられるであろうが、彼らの国境警備隊への襲撃がクロアチアやボスニアやコソボに連鎖反応を起こし、ユーゴスラビア崩壊の方向を後戻りのきかないかたちで決定的なものにしたことは銘記しておかなければならない。ユーゴ内の最も裕福な共和国だったスロベニアは、もはや、より貧しい他の共和国と共同歩調をとる気はなくなったのだ。この戦闘で67名の死者や多くの負傷者を出したことは悲劇であるが、その後に続いたユーゴ全土の戦争の犠牲者は、それとは比べものにならないくらい膨大な数に上ったのである。

ここで付記しておきたいのは、ドイツやオーストリアでは当時すでに ―

周知のようにその後は全西欧諸国でも―この独立戦争の死者を、ユーゴの全共和国に存在している狂信的なナショナリストに帰することなく、もっぱらセルビア人のせいにしたことである。そして今日、ＮＡＴＯのユーゴスラビアに対する空爆を正当化しようとするとき、スロベニアの独立戦争におけるセルビア人の「犯罪」に言及するのが常である。そこでは、その「犯罪」は、疑問の余地のないものとみなされているが、そのさい、この時点のユーゴスラビアで指揮権を有していたのは誰だったのか、ということが不問に付されている。連邦軍の出動を命じたのは、第一にユーゴスラビア連邦首相であったクロアチア人のアンテ・マルコヴィッチである。そして丁度そのときにユーゴスラビア連邦大統領に選ばれたばかりだった、やはりクロアチア人のスティペ・メーシチは、連邦軍の投入に対する批判をきっぱりと斥けたのである。

けれども誰もそんな「副次的なこと」に関心がない。ただスロベニア人だけは最初のうちはこのことを認識しており、『フランクフルター・アルゲマイネ』紙によれば、戦闘に至った主な責任を連邦首相のマルコヴィッチに帰していた。アメリカは、当時はまだ前面には出ていなかったが、同紙によれば、この戦闘の直前にベオグラードを訪問したベーカー国務長官が、ユーゴ統一を維持するためには武力行使も排除しないとして、マルコヴィッチや連邦軍の指揮官たちを鼓舞したと伝えられている。]

＊ドイツの転換 ― あるいは「セルビア人によるテロ」　［大意］

［７月の初めにスネジャナが彼女の二人の子供を連れてドイツへやってきた。我々はレーゲンスブルクで数日を共に過ごし、その後、フォアアールベルクにいる私の娘のところへ行った。(9) ７月中旬に皆で一緒にザダールへ行こうというのが我々のプランだった。不穏な状況が急激に進行しているため、そのような旅行に果たして責任がもてるかが、ずっと私の心に重くのしかかっていたが、結局、その旅行は実現した、五人全員で・・・

スロベニア独立戦争のあわただしい日々の後、７月初めに、状況はヨーロッパの圧力によりいくらか鎮静化したようにみえた。バルカンの闘争心は熱く燃えていたが、果てしなく長い会議を重ねて、ＥＣ(10)の方針に大抵は譲歩していた。たとえば1991年７月７日にブリオニで行われた会議では、スロベニアとクロアチアにおける三ヶ月間の停戦および独立宣言の効力停止のみならず、ＥＣの支援のもとでの全戦争の平和的解決にすべての参加者が合意した。このセンセーショナルとも評されたブリオニ会議の決定が、最終的に我々の

旅行の決断にも大いに影響した。我々はみずからに言い聞かせたのだ。戦争は、遅ればせながらも最後のぎりぎりのときになって食い止められたのだ、と。

あとから振り返ってみれば、当時、スロベニア戦争に対する評価において、現地でもドイツでも或る劇的な転換が起こっていたことを考えると、これはあまりにも素朴な間違った判断だった。そのような転換がなされたことについては、当時も見落としてはいなかったが、それが何を意味していたのかについては、ずっと後になって初めてわかったのである。

私がこのような転換に最初に気づいたのは、ゲンシャー[11]のインタビューによってである。その中で彼は、いつもの流儀とは異なり、— ほとんど険悪といってもいいような激しい表現で — セルビアの特定の政党を唯一の攻撃者として非難し、これに対して最も厳しい措置を講ずると予告したのである。私は耳を疑った。なぜならそのような見解は、他のＥＣ諸国、なかんずくフランス、イギリス、イタリア、オランダ、ルクセンブルクの立場とは全く相容れないものだったからである。これまでゲンシャーの親ユーゴスラビア的な態度に対してたびたび辛辣に批判してきた『フランクフルター・アルゲメイネ』紙も彼の意見の驚くべ転換を指摘し、将来、スロベニアとクロアチアがベオグラードのセルビア共産主義から解放されるならば、ゲンシャーが真っ先に彼らから感謝されるであろう、と書いた。

このゲンシャーのインタビューに続いて、ヘルムート・コール[12]も、またＳＰＤ［ドイツ社会民主党］のハンス＝ヨッヘン・フォーゲル、ノルベルト・ガンゼル、カルステン・フォイクトというような大物たちも、似たような立場を表明した。それどころか、ＳＰＤおよび「緑の党」－当事は野党だった—は、さらに先までいき、ドイツ政府がただちにスロベニアとクロアチアを（国家として）承認するように要求した。またそれはマスコミの論調とも合致するものだった。私は当時、他のＥＣ諸国がこの時点ではスロベニアとクロアチアの承認に激しく反対していたこともあって、上記のようなドイツの変化をあまり重視しなかった。

だが、我々が旅行に出る前に、私が非常にショックを受けたことがまた起こった。1991年７月８日、私が大変評価していた『シュピーゲル』でも明白な方向転換があり、「セルビアのテロ — ユーゴスラビアの民族収容所」という大きな文字で書かれた見出しが掲げられ、低級な通俗写真誌並みの扇情的などぎつい戦争場面のモンタージュがそれに添えられており、記事の中身もそれに対応したもので、ユーゴスラビアの戦争状態のエスカレーションの

原因を、各共和国内のナショナリストによるものではなく、専らセルビア人のせいにし、いまやヨーロッパ、特にドイツがこれを停止させなければならない、というものだった。もちろんこれ以前の数ヶ月間の『シュピーゲル』においても時々は反セルビア的な記事を目にすることはあったが、報道記事の大部分はバランスがとれているように思えていた。すなわち抗争のいずれの側のナショナリストにも批判的であり、私の見解とも一致するものだった。ところが突然、『シュピーゲル』にあっても、バルカンの個々の共和国を善か悪かで一面的に振り分けるということが行われるようになったのである。

それ以降、ほとんどのドイツ語圏のメディアで、まるで合意がなされたように、明らかな方向転換が行われたことが感じられた。これまでは互いに距離のあった両メディア、保守的で右寄りだった『フランクフルター・アルゲマイネ』紙とリベラルで左派的な傾向をもつとされていた『シュピーゲル』誌が、この重要な問題では一致し、それがメディアの主流となって、あらゆる潮流を巻き込んでいったのである。それは必ずしも、他の意見が全くなかったという意味ではなく、『南ドイツ新聞』や『フランクフルター・ルントシャウ』や『ツァイト』や『ヴォッヘ』や『シュテルン』の誌上で、もちろん『シュピーゲル』においても、また深夜のＴＶレポートなどにおいても、主流とは別の意見に接することも確かにあった。しかしこのような意見は、バルカンについての善悪二元論のイメージを変えるまでの力はもってはいなかった。このような状況は、現在に至るまで変わっていない。]

＊夜中の爆音　［全訳］

私たちは旅立った。だが、もちろんスロベニアを通っていく通常のルートではなく、イタリア経由で、つまり、アンコナ[13]までは車で、そこからザダールまではフェリーで行った。けれどもイタリア内の走行は、丁度この日、自動車道の料金所の従業員がストライキ中だったために、悪夢のようだった。夜通し、渋滞していたために出ることもできないまま、高速道路「アウトストラダ・デル・ソル」に釘付けになったままだった。それでも何とかそれもやり過ごし、次の晩、今度は船でついにザダールに着いた。

私は、〔このたびは〕ザダールで〔前回のような〕調査[14]をこれ以上進めることはせずに、自分の娘のためにすべての時間を使おうと固く決めていた。娘のヴェラは、すぐにマリアの小さな娘のアナと仲良くなった。私たちは最初の夜を、再びスネジャナの従妹ドゥシュカの所有するあの瀟洒なアパート

で過ごした。

真夜中、突然、異常な爆発音がして、私は眠りから起こされ、すぐにテラスに駆け出した。何も認められなかったものの、すぐ近くに爆弾が落とされたに違いないと感じた。ヴェラがすぐにまた眠り込んでくれてほっとしたが、私はもう眠れなくなった。そこには、私と娘のほか誰もいなかった。

この夜、私の頭の中を駆け抜けたことをすべて語るなら、きっと笑われるだろう。私は敢えて明かりをつけず、もうすっかり静まりかえったテラスに何度も忍び足で出てみて、自分がひょっとしてただ夢を見ていただけなのではないかと自問し、玄関のドアに耳を当て、もしかしたら誰かが私のことをあのベオグラードのナンバーをつけた車のドライバーとして憶えていたのではないか、[15] などとあれこれ考え、室内の花瓶やグラスをすべて台所に運び、ブラインドとカーテンを下ろし、ライターの明かりだけに頼って、机やクッションやトランクでバリケードを作って、ヴェラのベッドの前に置いた。ヴェラのベッドは、眺めのいい大きな窓から三メートルと離れてはいないところにあったからである。私には、自分が夢を見ているのではないことがわかっていた。否、戦争が始まったこと、いつ次の爆発が起こっても不思議ではないことを確信していたのだった。

いつのまにか外が明るくなってきた。ヴェラはまだ眠っており、私は、スネジャナが来るまで待っていた。彼女はようやくやってきたが、すこぶる機嫌がよかった。爆発音だって？　どんな？　彼女には何も聞えなかったというのだ。たしかに、このところセルビア人たちの家は爆破されている。それは、彼女がこの前ザダールを発ってドイツへ行った後で、その前よりはずっと頻繁に、ほとんど毎晩のように起こっている、と、彼女も聞かされていた。もちろんそれは恐ろしいことだわ、でもそれは、どうしようもないことなのよ。彼女がこう言ったとき、私は再び、自分が何もわかっていなかったことがわかった。街なかのセルビア人の家の爆破は、日常のことだったのだ。ザダールには当時、およそ18000人の「セルビア人」が住んでいた。私のベッドには、「セルビア人のテロ」を特集した『シュピーゲル』が置かれていた。

＊世捨て人、ミルコのところで　　［全訳］

私は、直ちに出発しようと主張した。もともと、数日間ザダールで過ごした後で、街に面した島の一つに出かけることにしていた。その島にアイーダ

の両親の大きな別荘があるのである。スネジャナは、私が真剣なのを感じたが、アイーダの両親と連絡がとれなかった。けれども私は非常に興奮していて、「僕はもうここでは一晩も眠れないよ」と、譲らなかった。それでスネジャナは切羽詰って、いい案を思いついた。彼女は、彼女の父の友人であるミルコに無線で連絡した。彼は、人けのない或る寂しい島に住んでいたのだが、すぐさま歓迎の意を表してくれた。スネジャナは私の車を入れておく安全なガレージの手配をし、もうその日の午後のうちに、私たちは、街から一番遠く離れた、外海に面した長い島、ドゥーギ・オトクに向かう船に乗っていた。

ミルコは、およそ60歳前後のベテランの船乗りで、褐色に日焼けし、丸々と太っており、髪をお下げにして後頭部におどけた感じに束ねていた。彼は、もう既にサーリの港で、自分の漁船に乗って待っていてくれた。その船へ私たち五人も荷物をもって乗り込み、船はすぐにエンジン音を立てて動き出した。ここまでの船旅 ― 北ダルマチアの島々のあいだを通り、数回、港にちょっと立ち寄り、すてきな漁村のかたわらを通り過ぎてきた ― が既に息を呑むような美しいものだったが、ミルコの小船で連れてこられたところは、まだ手の触れられていない楽園だった。私たちは、日没の直前に彼の住居に着いた。

彼は、ほとんど目が見えない妻と一緒に、コルナト諸島の真ん中に住んでいた。それは、私も聞いたことのある国立公園で、非常に小さな島を含む無数の島々から成っていた。そこは20年前から建築が全面的に禁止されている区域であるが、ミルコの家はそのずっと前から建っており、周囲数キロにわたって他の家がない。質素だが、絵のような石造りの家で、嵐から守られた湾の中にあり、茂った葡萄の木に囲まれて、海からはほとんど見えず、しかも岸から歩いてすぐのところにあるのだ。

私たちはミルコのところで5日間過ごした。それは、疑いようもなく私の人生で最も美しい日々だった。そこには、私たちが通常馴染んでいるようなものはいっさいなかった。たとえば、テレビやラジオもなく、また電気も、数年前にスネジャナがミルコと共に取り付けたソーラーコレクターから得られるもの以外はなく、水は、天水桶に溜まった水があるだけである。何よりも人間がいないので、風と海の音以外の騒音は全くない。ただ時折聞える、ミルコの無線機のカタコトいう音と遠くの灯台の回転灯だけが、世界には私たちだけではないことを思い出させてくれるのだった。

早朝、ミルコが船で湾に出るときはいつも、私も一緒についていった。そ

んな日は、おいしく焼けた小さな魚が朝食の食卓にもう出てきて、私たちはそれを「まるごと」平らげたものである。また一日中シュノーケルをつけて澄みきった海の中に潜ってたくさんのきれいな水晶を見つけたり、夜ごと大きな星のまたたく天空について学んだり、また望遠鏡でムフロン〔野生の羊〕の群れを観察したり、茨と角ばった岩の間を通って裏山によじ登って、その頂から、この世のものとは思えないようなコルナト諸島の筆舌に尽くしがたい素晴らしい光景を眺めたりした。

政治については、一言も言葉を交わすこともなく、あまり話題にならず、考えることさえなかった。私たちはミルコを、その後の数年間になお何回か訪ねた。ミルコは通常、週に2回サーリに出かけて数箱の水とかミルクとかパンのような必需品を仕入れていたが、それ以外は、彼ら夫婦は、お互いの調和や自然との共感のうちに自足しながら晩年を送っていた。私は、自分にはそのような人生が想像できるだろうか、としばしば自問した。そして今でも、時々そのことを考える。残念ながら、最近、ミルコの死の知らせが私たちのもとに届いた。

＊ロマンとニナ　―　あるいは「何なら、そいつを明晩ぶっ飛ばしてやるぜ」［全訳］

私たちは、〔ミルコのところから〕アイーダの両親のところに行くことになっていた。それでサーリまでミルコの船に乗せていってもらい、そこからフェリーで再びザダールに行った。私たちが休暇の後半を過ごそうと思っていた、アイーダの両親の住むウグリャン島は、ザダールの海岸から一番近い、やはり長い島だったが、そこでは車が必要だったので、ザダールにいったん戻ることが避けられなかったのである。またスネジャナには、ザダールの街で片付けなければならない用件がいくつかあった。それで私たちは、次の晩をザダールで過ごした。

その晩、私たちは、ロマンとニナのところに招待された。それ以後、彼らは長年にわたって私たちの最良の友人となり、私は年に何回もザダールやレーゲンスブルクで彼らと会うことになった。彼らは、海からあまり離れていない公園の中の素晴らしいロケーションの大きな家に住んでいた。その家は、今日でもまだ完全には仕上がってはいない。ロマンは建築家で、サラエボで育ったが、クロアチア人、失礼！「純血のクロアチア人」で、クロアチアの商工会議所で働いていた。彼の父はザダールの町医者で、その家族は名門の

出である。ニナの「混血率」については、私は今日でも十分には理解していない。私が思うには、彼女はクロアチア人である。しかし彼女にはボスニアに住んでいる異母姉がいて、その姉は当地では政治的に重要な人物であった。この人物については後で言及することになるだろう。ニナは、当時は専業主婦だったが、のちにはビジネスも行うようになった。彼女は三人の子供の母であるが、子供たちは、ロマンと同様、とても可愛くて感じのいい子たちだった。

この晩、彼らのところには、たくさんの人たちが訪ねてきていた。その人たちとは、私はその後一度も会ってはいない。より適切な言い方をすれば、彼らは単にその場に居合わせた人たちというだけのことだった。というのは、私が何度も見てきたことだが、クロアチアでは、人々の相互の訪問は、招待されたからというのではなく、単に誰かのところへ行き、そこでその場にいる人たちと会い、そこにいる人たちは、いわば家族の一員のようになるのだ。ニナの家でも、常に人々の出入りがあった。

私も、テラスやテレビの置いてある部屋や食堂で、再三、何人かの人たちに紹介された。皆、非常に親切だったが、誰もそれ以上私に注意を払うことはなかった。ヴェラは、たくさんいた犬や猫と遊び、私は、たいていニナと話していた。ニナはとても魅力的な話し相手だった。ザダールで起こっていることについて、彼女は大変心配していた。つい最近まで、誰がクロアチア人で誰がセルビア人あるいはムスリムであるかなんて、誰も気にしなかったし、大抵の人たちは知ってもいなかった。「そんなことは問題にならなかったのよ。」　ところが今日では、多くの人たちにとって、それが一番の気がかりになっているかのようだ。彼女は、ほかにも芳しくない話をいくつかしたが、それに加えて、反ナショナリズムの立場に立つテレビ番組「ユー・テル」が、数日前からクロアチア全土で、政府による周波数妨害のために、夜中の1時と2時のあいだにしか（！）見られなくなった、と語った。またリベラルな週刊誌『ダナス』が、廃刊直前の状態にあることも……

その後、私たちがテラスに腰を下ろし、重く垂れ下がったキウイや無花果（いちじく）の木に囲まれておいしいワインを飲んでいたとき、私たちからほんの数歩離れた庭で、或る驚くべきシーンが繰り広げられていたのである。そこには四,五人の若い男たちから成る一団が、激論を交わしながら立っていた。ニナは常に彼らの方にも耳を傾け、時には私との会話を中断して彼らの言葉を聞き取ろうとしていたが、ついに、それを私のために通訳してくれた。彼女は彼らを全員知っているわけではないが、その一人は重要な人物で、特殊警察の

ような立場の人間であるとのことであり、彼らが話しているのは、その一団の一人からおそらく多額の借金をしていると思われる或るクロアチア人のことだということだった。そしてその時、あの言葉が発せられたのである。「何なら、そいつを明晩ぶっ飛ばしてやるぜ」　それは、ニナが重要だといった人物が、借金をしている人間 ― ニナが何度も強調したようにクロアチア人である ― について、一字一句その通りに〔クロアチア語で〕言ったとのことである。それはまたもや、私の記憶に残る出来事となった。あとで私は、少なくとも匿名でその当事者に警告しなくていいだろうかと尋ねたが、ニナはただ首を横に振るばかりだった。第一に彼女は、彼らが誰のことを言っていたのか知らないし、どっちみちもう空っぽになった家を爆破するだけだろうし、また誰もそれを止めることはできないから、と……

＊「ドン、終わり！」　　［全訳］

その夜は、〔何も起こらず〕静かなままだった。とにかく私には何も聞えなかった。そして私たちはその後、ウグリャン島で素晴らしい一週間を過ごした。出発の日が近付いたが、私たちの別れがただの単純な別れにはならないだろうということが予測できた。スネジャナと私はこれまでずっと一緒にいたので、これから突然別々の道を行かなければならないというのは、想像し難いことだった。ヴェラも、スネジャナの子供たち、アテナとペロとは、とてもよく心が通い合っていた。けれども他の選択肢はなかった。ヴェラと私は帰るほかなかった。

出発の前の晩、ザダールでの私たちの三度目の夜、私はまた爆発音で眠りから起こされた。それはあまり激烈なものではなかった。おそらく遠く離れた地点で起こったものにちがいない。私はすぐにまた眠り込んだ。それによって、人がこんなことにもすぐに慣れてしまうものであることがわかった。

だが次の日の午前、私は、「ぶっ飛ばされた」家というものを初めて目にした。それは、―よく使われる言い回しのように―「風に吹かれて」漂っていた。昨夜の爆発は、スネジャナの両親が住んでいる丁度その道路で起こったのだ。それは、その家から直線距離でひょっとして150メートルぐらいしか離れていないのではないかと思われるところだった。スネジャナの弟のサッシャは私にすさまじい爆音について語り、私をその現場に連れて行ったのである。

どっしりとした真四角の、かつては豪華だった一戸建ての家が倒壊してい

た。その家の上半分は、窓が煤(すす)けた無気味な穴に変わっていることを除けば、屋根も含めて、ほぼそのままの形が保たれていた。だが建物の下、地面のすぐ上の底面が50センチメートルほど欠けているようにみえた。たとえてみれば、ちょうど、トランプで組み立てた家を、全体は崩さずに、下から二番目の階だけを横に倒したようだった。その家のあった区域では、各戸がびっしりと－少なくとも両隣とのあいだに法的に必要とされた十分な間隔をあけずに－建ち並んでいたので、近所の家々のガラス窓もすべてやられていた。

黒い制服の男が庭に立っていた。サッシャの辛口のユーモアにはその後も度々感嘆させられたものだが、このときも彼は、その警官と笑いながらお喋りした。その若い警官は、サッシャが私をドイツ人旅行者と紹介すると、片言のドイツ語で「セルビア人の家をやっただけだよ。チェトニク[16]の家だよ！チェトニクの！」と、手で侮蔑的に払いのけるような仕種(しぐさ)をして言った。そのあと舞台役者のような身振りで、爆破をどうやってやるかを示してみせた。建物にガスをポンプで送り込む、特に地下室に送ることが重要だ。すると「ドン！それで終わりさ」と。

のちに私は、この家が、その町では名の知られた或る女性教師のものであることを知った。彼女はクロアチア人であるが、不運なことにセルビア人と結婚していた。夫は数年前に亡くなっていたのだが、上記のことからわかるように、それも彼女には何の助けにもならなかった。にもかかわらず、彼女はひとまず運がよかった。というのは、彼女は大変好かれていて、以前の教え子たちがその家を修理して再び住めるようにしてくれたからなのであるが、それも束(つか)の間のことにすぎず、そのすぐ後に、その家がまた爆破されたのである。

戦争前のこのような夜の「連続爆発」は、ザダールに限らずクロアチアの他の場所でも起こったが、その跡は、10年後の今日でも至る所で大量に目にすることができる。これら無数の廃墟は、ザダールであれ、どこであれ、おそらくこれからも長く人々の「感嘆」を誘うことになるのであろう。誰も瓦礫を片付けない。それらの家の所有主は既に逃亡し、いまはセルビアのどこかで暮らし、もう決して帰ってはこられない。しかしこれらの醜い瓦礫の山は、「より高次の」目的に役立っているのだ。すなわち、それらは、何の予感も持たずに訪れた外国人訪問者の目に、「セルビア人のテロ」の記念碑として曝されているのだ。

＊スネジャナとの別れ　　［全訳］

私たちのフェリーは、昼前に出航することになっていた。スネジャナは港までヴェラと私を見送りにきて、チケットの手配をしてくれた。私たちはうっかりしていたのだ、というのは、チケットを求める人がとても多かったのだ。とはいえ、何とか座席を確保することができた。

それから、その時がやってきた。私たち二人はその場に立ったままだった。ヴェラはもう列を成して待っている車の中にいた。スネジャナも私も、一言も口をきかなかった。それはたしかに、私の人生で最も重大な瞬間のひとつだった。「私は逃げ出そうとしている。ヴェラと自分を安全圏に置き、スネジャナとアテナとペロを、戦争がすぐそこまで迫っている場所に残していくのだ」、そのことをいま初めて現実のこととして意識した。もちろん、戦争がすぐそこまで迫ってきているという予感は、これまでもあった。多くの会話や爆発から、あるいは、チケット売り場に立っていた無言の女性から、あるいは、私たちの側を怒りを含んだ顔つきで足早に急いで通り過ぎて行った人たちからも、戦争の近づくのを予感はしていたが、戦争になることがはっきりとわかったのは、この瞬間であった。だが、私たちは泣き喚くこともなく、何も言わず、ただ無言のままでいた。それから、いつかスネジャナは向きを変え、去っていった、港の岸壁に沿った長い道を歩いて……。私は、彼女の姿が見えなくなってもずっと、その場に立っていた。そして自分をひどく惨めに感じていた。

私は、意識をヴェラに向けて集中しなければならず、ヴェラに何も気づかれないようにしなければならなかった。けれども船内に入ることができるようになるまで、非常に長い時間がかかった。そしてその後も、船はなかなか出航しようとしなかった。私はパニックに襲われた。なぜ、最初に予定していたように、昨日出発しなかったのか。もしいま突然「全員もう一度下船せよ！」と言われたら、どうしたらいいのだ？　陸路は通行不能なのだ。

それでもようやく、ついに船は動き出した。しかし自分達がある程度安全であるとわかったのは、さらに非常に長い時間まったく陸地が見えないまま航行し続けたあとになってのことだった。スネジャナは今どうしているだろうか？それは考えてはいけないことだった。船は縁まで人があふれていたが、それらの人々は、旅行者たちではなく地元の人たちばかりだった。彼らがクロアチア系クロアチア人なのか、クロアチア系セルビア人なのか、セルビア系クロアチア人なのかはわからないが、誰であれ、皆が同じように安全圏に

身を移したことは明らかであった。私はいくつかの激しい争論に巻き込まれたが、[ドイツの] ドルトムントで働いているという男が、セルビア人がどんな「豚」なのかを再三説明しようとした時、ほとんど冷静さを失いそうになった。船上での話題はただ一つ、戦争のことのみだった。当地では、戦争は“ｒａｔ”といい、ドイツ語の“Ｒａｔｔｅ”[ねずみ]と似たような発音で、ただ最後の“ｅ”がないだけである。

ヴェラと私は、何事もなくフォアアールベルクに到着し、私はそこから一人でさらにレーゲンスブルクに帰った。それは、1991年８月３日のことだった。それから二週間、私は、世界で何が起こっているかについての詳しい情報を知らないまま過ごしたが、ただブリオニでの合意がとっくに反故と化したことや、８月３日にベオグラードでおそらく和平のための最後の会議となるであろうといわれた重要な会議が開催されるという情報は、もちろん入手していた。私が帰宅するかしないかという時に、この会議が決裂したという、ベオグラードからのニュースが飛び込んできた。オランダの外相、ヴァン・デン・ブルークの言葉が引用されていた。「我々は立ち去る。ここには、我々にできることはもう何もない。」

スネジャナもこのニュースを知っているに違いない。私は、躊躇することなく彼女に電話して、ただ次のように言った。「子供たちを連れて次のフェリーでアンコナに行き、そこからレーゲンスブルクに来てください。急いで！」

８月８日に彼女は、９歳と11歳の二人の子供を連れ、トランクを一つ持ってやってきた。その二日後に、戦争が勃発した。

＊ドイツでの新スタート　　[全訳]

戦争が始まったとき、スネジャナにも私にも、この戦争が、スロベニアの戦闘と同様に数日しか続かず新たな「ブリオニ合意」のような協定で終わることになるのか、それとも数週間、数ヶ月あるいは数年続くことになるものなのか、予測がつかなかった。それで私たちは、今回は最悪の場合を想定し、三人が少なくとも当分の間はドイツに留まるようにすることに決めた。彼らは今もここにいる。

そこで先ず片付けなければならないことがいくつかあった。当時、私は、40平方メートルのワンルームマンションに住んでいたが、いまやそこに四人で住むことになった。レーゲンスブルクの住宅市場は当時かなり困窮していたが、それでも、私たちは短期間に何とか住居を見つけ、また、滞在許可や

医療保険等々のさまざまな手続きも終えた。

ただ残念ながら、スネジャナは、大急ぎで旅立ったために、ドイツでの長期滞在に欠かせない多くの必需品をザダールに残したままにしてきていた。そこで私たちは二人で、9月初めに車で、彼女の妹のいるリエカ[17]まで行った。そこへ、そのような品々を送っておいてもらっていたのだ。それは、かなり重苦しいドライブとなった。軍による検問がいくつかあったほかは、戦闘行為はどこにも見当たらなかったが、家々の窓ガラスにはすべて、爆発で破片が飛び散るのを最小限に食い止めるために、広いガムテープが貼り付けられていた。また、どの建物のまわりにも砂袋が積み上げられており、人々が神経を張り詰めている様子が至るところに感じられた。私たちはリエカに一時間しかいなかったが、私はひどく怯えていた。

次の難問は、学校のことだった。アテナとペロは、ヴェラから習った十語ほどを除けば、ドイツ語を全く話せなかった。ただ、ドイツには幸い、[外国人をサポートする] しっかりと根付いた支援制度が存在する。アテナは、専ら新規入国の外国人の子供たちばかりから成るいわゆる移行クラスに入ったが、そのクラスの大多数の生徒たちのドイツ語力も、アテナと似たりよったりだった。まだ十歳未満だったペロは、小学校の三年生のクラスに潜りこんだが、クラスで唯一の外国人生徒で、第一週目には、授業内容は何ひとつ理解できなかった。にもかかわらず、この状態は、数ヶ月もすると、どんどん改善されていった。スネジャナもこの時まで彼らと同様、正規のドイツ語の授業を受けたことがなかった ―私たちの会話は専ら英語でなされていた― が、レーゲンスブルクの大学でドイツ語のゼミを聴講する手続きをした。このゼミは彼女にとって大きな喜びとなったが、それというのもとりわけ、それがよい気分転換になったからである。そして、そのような気分転換こそ、当時彼女が切実に必要としていたことだった。というのは、故郷から伝えられてくる毎日のニュースは、非常に気持ちを滅入らせるものだったからである。

[訳注]

1）オーストリアの最西部、スイスとの国境近くにある州。著者は、当地に生まれ、1989年まで滞在した。

2）ライン川やドナウ川の上流に住んだ西ゲルマンの一種族。

3）いずれもクロアチアのアドリア海沿岸にあり、イストリアは北の半島、ダルマチアはそれより南の沿岸地方をさす。

4）本稿・前々号（熊本県立大学文学部紀要第10巻第２号所収）76頁参照。
5）スネジャナの住む、アドリア海沿岸の都市。
6）1991年５月１日に起った「ダルマチアの水晶の夜」をさす。本稿･前号（熊本県立大学文学部紀要第11巻）61-67頁参照。
7）1942年、オーストリアのケルンテン州に、スロベニア人を母として生まれた現存の作家。60年代後半から長短編の小説、戯曲、詩、エッセイなど、多彩なジャンルにわたって多作かつ実験的な手法で現代を描き、現代ドイツ語圏文学の最も重要な作家の一人となった。90年代に入ってからは、ユーゴ問題について発言するようになり、特に1995年と1999年のユーゴ旅行記は、激しい論議を巻き起こした。拙訳『空爆下のユーゴスラビアで』（2001年、同学社）参照。
8）この引用について、原著には次のような注がつけられている。
Hannes Hofbauer (Hg.): ≫ Balkankrieg ≪, Wien 1999, S.61.
9）スネジャナには、セルビア人の前夫とのあいだに生まれた二人の子供（娘アテナと息子ペロ）があり、著者にも前妻との間に生まれた娘（ヴェラ）がいる。スネジャナは、彼女の子供たちとクロアチアのザダールに住み、著者は一人で南ドイツのレーゲンスブルクに住んでおり、彼の娘ヴェラは、彼の故郷のフォアアールベルクに住んでいる。
10）ＥＣ（欧州共同体、ドイツ語ではＥＧ＝Europäische Gemeinschaft）は、ＥＵ（欧州連合）の前身。ＥＵは1993年11月１日に創設された。
11）当時のドイツ外相。本稿・前々号、76頁参照。
12）当時のドイツ首相。同上。
13）アドリア海に面したイタリアの都市。
14）出会った人々との会話から、ユーゴの現況や他民族についての考えや感情を読みとろうとした試み。前号及び前々号参照。前号75頁で、それが「調査」と呼ばれている。
15）本稿・前々号、80頁及び85頁参照。
16）第二次大戦中に結成されたセルビア民族主義者の集団。本稿・前々号、87頁、注（11）参照。
17）クロアチアのアドリア海沿岸、イストリア地方の街。

［前号訂正］
本稿･前号67頁26行目
誤：「でもその前に子供たちを殺してから行け」
正：「でもその前に、子供たちが殺されるようなことはするな。」